

メシア初臨預言の学び 諸書の部

I 歴 17 : 10b~14 ダビデ契約、詩 2 : 7~12 神の子
 詩 16 : 1~11 メシアの死、詩 22 : 1~31 メシアの受難と高揚

はじめに

1. 神と人との契約：ヘブル語聖書に記される八つの契約
 (1) 契約の当事者の人は、全人類か、イスラエル民族か。
 また、契約の内容が、条件付きか、無条件か。この二つの基準で分類すると・・・

	条件付き契約	無条件契約
全人類	① エデン契約	② アダム契約 ③ ノア契約
イスラエル民族	⑤ シナイ契約	④ アブラハム契約 ⑥ 土地の契約 ⑦ ダビデ契約 ⑧ 新しい契約

(2) 点線で囲んだ契約は、すでに終了したもの

(3) メシアの家系に言及している契約は、三つ

- ② アダム契約 → 創 3 : 15 女の子孫
 ④ アブラハム契約 → 創 22 : 18 アブラハムの子孫
 ⑦ ダビデ契約 → I 歴代誌 17 : 10b~14 ダビデの子孫

2. 詩篇について

- (1) 詩篇のうちの多くが、ダビデによる。
 (2) 詩篇は、律法と預言者のメッセージを詩的・音楽的に表現したもの。
 (3) 詩篇は、私たちの日々の静思の時に有益であるが、それに限られるものではない。
 詩篇には、意味深い教えが多く含まれている。詩的な調べにのせて、深い霊的真理が語られている。

I 歴 17 : 10b~14 ダビデ契約

1. ダビデ契約に関する聖書箇所は二つ
 - (1) IIサム 7 : 11b~16
 - ① ダビデの子が神殿を建設する。→ ソロモン
 - ② 彼は罪を犯す。→ 異邦人の妻たちをめとり、その影響で偶像崇拝に陥る
 - ③ しかし、契約に基づく神の愛は、彼にとどまる。
 - ④ 16節 三つの永遠のもの=家(王朝)・王国・王座
 - (2) I 歴 17 : 10b~14
 - ① 罪については全く語られない。
 - ② 13~14節 永遠のものに、4番目が加わる=「永遠の子」
 - ③ 王位につくお方が永遠に存在するお方であるから、王朝も王国も王座も永遠である。
2. ダビデの家系からメシアが出ることについての、制限条件=エレ 22 : 24~30
 - (1) バビロン捕囚となった王エコヌヤ(エホヤキン)の血筋は除外される。
 - ① マタイ 1 : 6, 11 ヨセフの系図 ソロモン-エコヌヤの血筋
 - ② ルカ 3 : 31 マリヤの系図 ナタンの血筋
3. メシアがダビデの家系から出るという預言の持つ意味
 - (1) イスラエル民族の中で、誰がユダ族のダビデの家系に属するか確認できたのは、紀元70年まで。エルサレムの神殿に保管されていた全イスラエルの家系図は、紀元70年のエルサレム陥落のときに、神殿とともに炎上、焼失した。
 - (2) よって、メシアは、紀元70年よりも前に現れているはずである。
 - (3) ユダヤ人たちが現代に至るまでも、メシアを待ち望んでいるのは、聖書の預言から見ると、誤りである。
4. I 歴 17 : 10b~14 の教える内容
 - (1) メシアは、ダビデの子孫である。ただし、エレミヤの預言により、エコヌヤの血筋ではない。
 - (2) 紀元70年の神殿破壊に伴ってすべての部族の家系図が喪失した。よって、メシアは、紀元70年よりも前に来ているはずである。
 - (3) メシアは、永遠に生きるであろう。
 - (4) メシアは、王となるであろう。

詩 2 : 7~12 神の子

1. 詩篇第2篇は、全体としては再臨の預言で、特にハルマゲドンの戦い。
2. 7~12節は、初臨の預言
 - (1) ヘブル語聖書で、「神の子ら」と複数形で言うときは「天使たち」を指す。単数形で「神の子」と言うときは「メシア」を指す。7節「わたしの子」12節「子」
 - (2) この箇所の内容は、ダビデ自身にはあてはまらない。

3. 詩 2 : 7~12 の教える内容

- (1) メシアは、神の子である。
- (2) メシアは、王となるであろう。(6 節により、王の都はエルサレム)
- (3) メシアは、全世界すなわち異邦人をも支配するであろう。

詩 16 : 1~11 メシアの死

1. この箇所概要

- (1) 1~2 節 メシアは、神を避け所とする。
- (2) 3 節 メシアの喜びは、聖徒たちとともにある。聖徒とは、信仰あるレムナント、イスラエルの残れる者である。(レムナントに関する預言、ゼカ 11 : 7、11)
- (3) 4~9 節 メシアがその生涯を通して全幅の信頼を置くお方は、父なる神である。
- (4) 10~11 節 その信頼は、たとえメシアの死のときですら、揺るがない。

2. この箇所のポイント

- (1) 神は、メシアが死ぬことを許容する。
- (2) しかし、神はメシアの魂をよみに捨て置かない。
- (3) すなわち、メシアは復活して、永遠に生きる。

3. 詩 16 : 1~11 の教える内容

- (1) メシアは、父なる神との特別な関係を持っている。
- (2) メシアは、死ぬであろう。
- (3) メシアは、復活して、永遠に生きるであろう。

詩 22 : 1~31 メシアの受難と高揚

1. 詩篇第 22 篇は、メシアに関する詩篇として代表的なものの一つ。

- (1) 全体的には、初臨に関する預言。部分的に、再臨に関する箇所がある。
- (2) 大きく分けると、二つの区分。第一にメシアの受難、第二にメシアの高揚。
- (3) 内容的には、イザヤ 53 章の預言とよく似ており、その詩的表現とも言えるが、書かれた時代としては、詩篇第 22 篇が先である。

2. メシアの受難

- (1) 1~2 節 助けを求めるメシアの叫び・・・イエスの十字架上のことば
 - ① 十字架にかかったのは、午前 9 時から午後 3 時の 6 時間。
 - ② 後半の 3 時間は、暗黒となる。その最後に、このことば。
 - ③ 暗黒は、神の怒りを示す。イスラエルとこの世界の罪に対する神の怒りが、イエスの上に注がれた。
 - ④ イエスは、この時以外は、必ず「父」または「わが父」と呼ぶ。ここだけが、「わが神」である。
 - ⑤ 「父」という呼び方から、イエスが神との間できわめて特別で固有の関係を持っていたことがわかる。
 - ⑥ しかし、十字架の上では、イエスはこの世界の罪ゆえに死んでいこうとしており、神との関係は、父と子の親子関係ではなく、裁く者と裁かれる者との

関係である。そのために、イエスは「わが父」とは呼ばずに、ここだけは「わが神」と呼んだ。

- (2) 3～5節 過去の救いを振り返る
 - ① 神は、どんな時にも救うことのできるお方である。
 - ② しかし、ここでは、それをなさない。
 - (3) 6～8節 さげすまれるメシア
 - ① メシアの苦しみを見ながら、よこしまな人間たちはメシアをあざけり、からかう。
 - ② この箇所の子りふは、その通りに、イエスの十字架の回りにいた人々が発したことばであった。
 - (4) 9～11節 それでも、メシアは神に信頼を置く
 - ① メシアは、彼が誕生したときから、神に信頼していたとある。
 - ② ここでは、メシアの母親に言及があるが、他のメシア預言の箇所と同様、一切、父親については触れられない。イザヤ 7:14 の通り、メシアは処女から生まれるからである。
3. 苦しみの描写
- (1) 12～13節 取り囲まれ、衆目にさらされた。
 - (2) 14節
 - ① 水のように注ぎ出され＝大量に流れる汗
 - ② 私の骨々はみな、はずれた＝十字架の縦柱を立てるときは、地の穴に投げ落とす。そのときの衝撃で、受刑者の関節が脱臼することがある。
 - ③ 私の心は、ろうのようになり、私の中で溶けた＝ヘブル語のニュアンスは、心臓が破裂する状態。槍で刺されたとき、血と水がほと走った。
 - (3) 15節
 - ① 私の力は、土器のかげらのように乾ききった＝肉体的な力が完全に失われる
 - ② 私の舌は、上あごにくっつく＝極度の渇き。十字架にかかって 6 時間、とくに後半の 3 時間は、神の怒りを一身に受けて、地獄の苦しみを味わった。ルカ 16 章で、金持ちが地獄に送られた直後から喉の渇きを訴えたのと、同じである。
 - (4) 16節 犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが私を取り巻き、私の手足を引き裂いた＝ヘブル語の原語では、小さな穴をあけて突き通す意味。イエスの手と足が十字架に釘づけられたことを指す。
 - (5) 18節 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物をくじ引きにした＝兵士たちがイエスの上着を分け、下着はくじで取る者を決めた（マタイ 27:35、マルコ 15:24、ルカ 23:34、ヨハネ 19:23～24）
 - (6) 19～21節 助けを求めるメシアの祈り
4. メシアの高揚：一転してメシアの高揚が語られる
- (1) 22節 会衆のただ中で、メシアが神を賛美する＝これが可能となるのは、復活
 - (2) 23～31節 メシアの復活後は、どうなるのか。再臨と御国の樹立。